

書叢化文子女

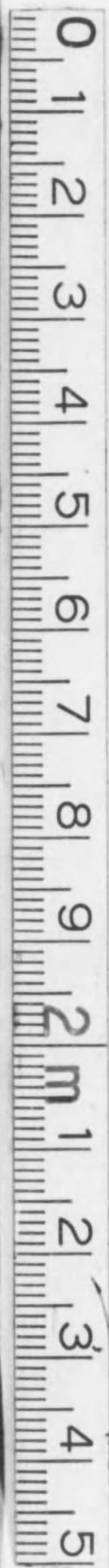
特 252

733

若き女性に贈る
山脇房子



編共 會人場合聯本日大
團年青子女合聯本日大



始



特 252
733



女子文書
化叢書

若き女性に贈る

山脇房子執筆

大日本聯合女子青年團理事長

大日本聯合婦人會
大日本聯合女子青年團
刊行



女子文書叢書

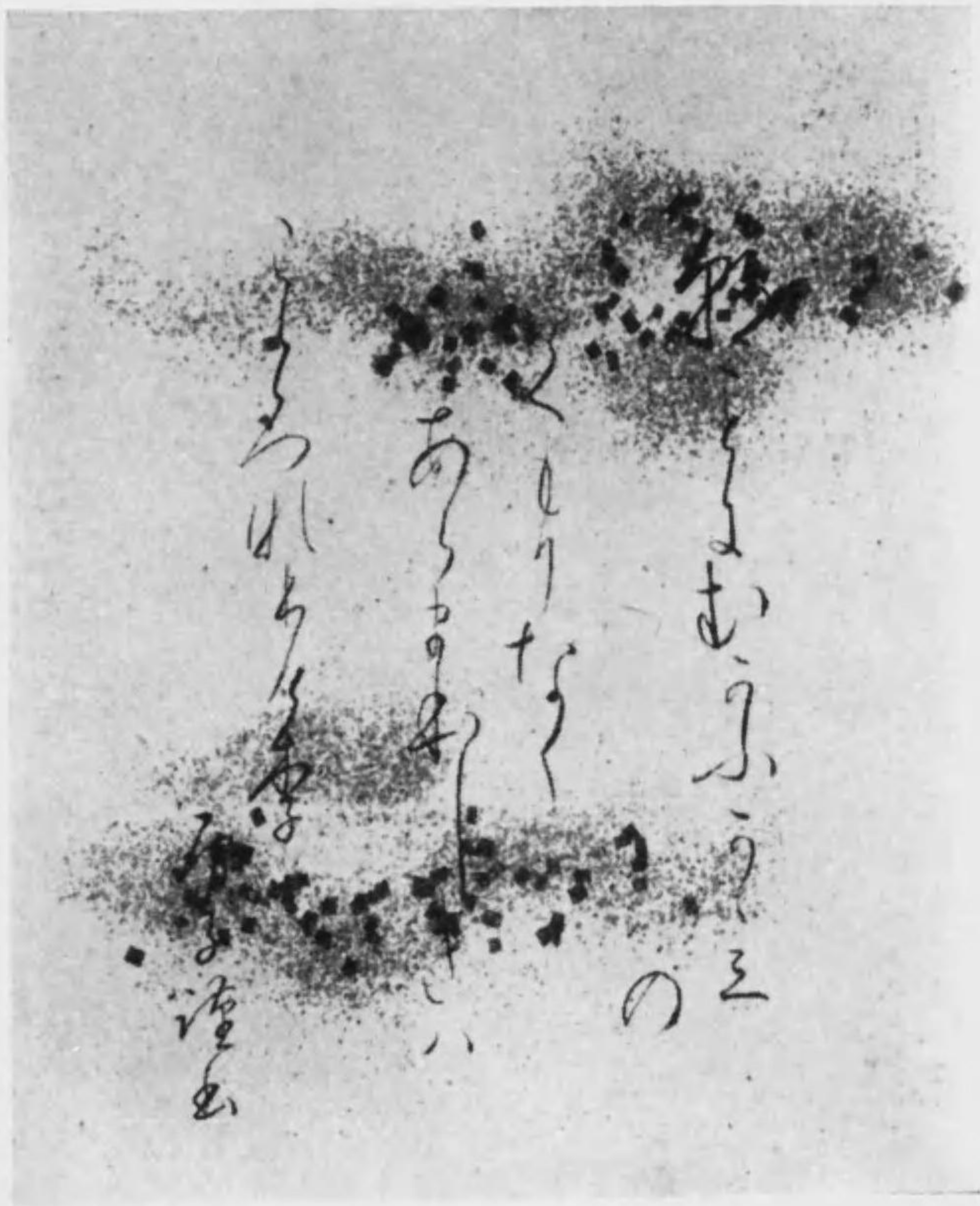
若き女性に贈る

大日本聯合婦人會
大日本聯合女子青年團

女子文化叢書刊行の辭

これまでも、兩會は日本に於ける系統的な女子修養團體の事業擴充の爲に幾分たりとも貢獻したい願望で、いろいろの試みをして参りました。女子文化叢書もこの一つでありまして、全面的修養と多方的奉仕に精進しなければならぬ私達の團體員に對し、眼を廣く手を巧者に、物の道理と事の技を簡明直截にお傳へするのが、本叢書の使命であります。毎月一冊の豫定を以て刊行して参ります。女子青年團、婦人會の講習會用、自習用として、また諸學校生徒の課外用としてお勧めして恥ぢないだけの自信を持つてゐます。

大日本聯合婦人會
大日本聯合女子青年團



昭憲太后御歌

朝とむにかふのみくもなりく
あはまはしこなるりけり

山脇房子謹書

内容目次

一 歴史に現れた女性を見て……………一

二 田園に生くるをとめへ……………四

三 明るく、優しく、朗に……………一〇

四 青年女子の讀書について……………一五

五 表情と癖……………二〇

六 女學校を卒業してから……………二四

七 嫁ぐ女性に……………三〇

八 餘暇を生み出すには……………三六

九 貞操觀念に就いて……………四二

一〇 犠牲的精神の輝き……………四八

一一 自己を知るが幸福の初め……………五三

若き女性に贈る

一、歴史に現れた女性を見て

古代の女性の社会的地位

我が日本の基礎をお定めになつた、天照大神は、貴い御身分であらせられながら、養蠶機織の業をお興しになり、農耕の事をもみそなはせられたのみならず、女性の御身を以て御親ら弓矢を御執りになつて、國を御護りになつたのであります。

私共の祖先である女性は心も體も剛健であり、又賢明であり、武將の妻の如きは、多く狩はおろか、戰場にさへも夫に従ひ、遠く外國にまで行つたものであります。之は唯臣下の場合のみならず、皇室におかせられても、其の例は少くないのであります。神功皇后は申す迄もなく、雄略天皇の皇后草香幡梭姫が天皇と共に葛城山の狩に御出かけになつた事もあります。

此の時狩の最中、一頭の猪が怒り狂つて天皇の方に突進して参りました。其の勢のすさまじさ、お傍に居た舍人も恐れて逃げてしまふ程でした。然し武勇にお優れになつた天皇は御自ら之を御仕留になりましたが、舍人の所業をお怒りになつて、お殺しにならうとなさいました。此の時皇后は優しくお諫めになつて、天皇の御心をお釋きになりました。有名な「人は狩に行つて禽獸をとるが、自分は善言を得た」と云ふ天皇の御言葉は此の時のお言葉であります。

上毛野形名の妻が卑怯な夫に代つて、蝦夷を追ひ拂つた事や、大伴狭手彦が三韓征伐に赴いた時、妻の松浦作用姫が取り残されたのを恨み歎いた事などを見ても、婦人が如何に多く夫と共に戦場等に活躍したかを示して居るのであります。

又私共として感歎するのは、日本上古の歴史の大きな出来事は大抵女性の手から始まつてゐる事でありませう。倭姫命が皇祖天照大神の祭祀にお當りになつて、その御一生を大神の奉仕にお捧げになつた事を始め、新羅を御征伐になつたのは神功皇后であり、唐へ國使を送つて交通の路をお開きになつたのは女帝推古天皇でありました。我が國史の出来たのも女帝元明天皇の御世であり、奠都の御計畫は女帝持統天皇の御宇であり、奈良の都をお定めになつたのは女帝元正天皇

皇の御時であります。

又我國の外國留學生も實に我々女性の善信尼等が最初であります。文學の方面を見ましても持統天皇は博く和漢の書に通じさせ給ひ、特に歌に秀でておいで、あつた事は、百人一首の御製を拜見しても知る事が出来ませう。更に平安朝時代に入れば、才媛は清少納言、紫式部を始めとして雲の如く現れたのであります。

鎌倉時代以後の女性

此の華かな女性文化も、惜しい事には、平安朝の後を受けた鎌倉幕府が封建制度を敷き、長男中心の制度をとると共に、漸次其の姿を消し、武力中心の武家時代に入つて、女性は全く影の人となり、政略などの犠牲に利用される道具の如くされてしまひました。従つて近世は、ある少數の人を除いては、心身共に上古の女性に比べる事が出来なくなりませんでした。

現代の女性とその覺悟

然るに明治維新となつて封建制度が破壊せられて歐米思想が入るに從ひ、女子教育も次第に盛んとなり、漸次女子の社會的地位も高められて参りました。従つて明治大正を経た昭和の今日の青年女子は知力も體力も昔に比べて非常に發達した事は誠に喜ぶべき事でありませぬ。然し長い間に養はれて來た思想や制度が變つて、まるで違つた新しい外國のものが急に入つて來た爲に、未だ精神上充分に調和されて居りませぬ。従つて今日の有様は、非常に種々雑多なものが入り亂れてゐる日本の昔からの好い所も忘れられ、外國の悪い所も其の儘取入れられてゐると言ふ有様であります。私共の家庭が夫々違つた特長を持つて居ると同様に、國や民族も又夫々違つた長所を持つて居るのであります。それですから我々昭和の新世に處する女性としては、此の點をよく考へ、勿論外國の長所は之を取入れる必要がありませぬが、之と同時に我が國にも亦昔から存在して居る何物にも換へ難い良い所のある事を忘れず、此等を充分に結び合せて、智力も體力も共に劣らぬ立派な新日本の女性となるやうに努め度いものであります。

一、田園に生きるをとめへ

農業は大古より重んぜられてゐた

我が國民の命の種は米が第一であります。此の米の稻と云ふ詞は昔から息の根即ち命の根と云ふ詞が、變つてイネとなつたのでであると申します。私共日本人がどんなに米に親しんでゐるか云ふ事は、長い間外國へ行つて居る人が、米の味がなつかしく態々お米の御飯を食へに歸つて來ると言ふ事でもよく判ります。

遠い神代の昔、保食神と云ふ神様がおいでになりました。ウケは食物と云ふ意味の詞で、保食神は食物の神様と言ふ意味であります。高天原に居らせられた天照大神は、保食神が食物をお持ちになつてゐる事をお聞きになつて、月讀尊を使者としてお遣しになりました。

保食神は大變お喜びになつて、山に向つて口をお開きになると、口から鳥獸が出、畑に向つて口をお開きになると、五穀が出、海に向つて口をお開きになると、魚が出ました。此を机に並べて、尊をお饗應し、ようとなさいました所が、月讀尊は穢いものと思召して、無禮であるとお怒りになり、劍を抜いて保食神を斬り殺して、其の儘お歸りになつてしまひました。

天照大神は此の事をお聞になつて、大變お怒りになり、月讀尊をお傍より退け、直ぐ天熊大人をお遣しになりました。天熊大人が保食神の所へ行つて見ますと、保食神の御遺骸から、稻、粟、粟、稗、豆、蠶、牛、馬に至るまで、生えておりました。そこで天熊大人はそれを持つて歸り、天照大神に奉りました。大神は之こそ人の食べて行くものだ、大層お喜びになり、稻を以て水田の種子とし、天邑君に此の種子を天狭田長田に栽培させられました。之が我國に於ける農業の始めであります。

保食神は後、丹波國比治の眞奈井の里に祭られておりましたが、天照大神は雄略天皇の御夢に保食神を伊勢の山田に祭る様に仰られました。そこで雄略天皇の二十二年七月に大佐々命を眞奈井の里にお遣しになつて、保食神をお迎へになり、お祭りになつたのが、豊受大神即ち伊勢の外宮であります。

此の外宮は内宮と共に、古より皇室の最も尊ばせ給うた所であります。之を見ても我國では如何に昔から農業が重ぜられたかが判りませう。又古は農民を大御寶と呼びました。最近の徳川幕府時代でも、士農工商と云ひ、農を工商の上に置いて居ります。誠に農民は息の根、命の種を

作る寶に相違ありません。農業に従事する者は、男も女も、自分は國家の大御寶であると云ふ心がなくてはなりません。

田園に生きる喜び

然し私は近頃の農村に、非常に悲しむべき事實を見ます。農村は次第に衰へて行く！と云ふ事でありませぬ。是は私が申す迄もなく、幾多の當局者や教育者によつて、夙に憂慮され、色々の對策が行はれて居るのでありますが、要は田園に在るあなた方の自覺に俟つの外ありません。一度故郷を捨て、都へ入つた婦人の大部分は、田舎の生活を嫌つて田園に落着くことを望みません。しかもよき家庭を作り、よき子供を育つべき筈の彼女は、次第に女らしさを失ひ、自分の男子も及ばぬ母性としての天職を忘れて、徒らに放縱な生活と、享樂の日を送ることのみ考へるやうになつて了ひます。

それなら、都會でよい嫁入先があるかと云ふに、なか／＼安樂な生活の出来る家がある譯でなく、折角嫁入つても、多くは夫婦共嫁ぎをしなくてはならないと云ふ有様です。それでも身を無

事に落ち着けたのはまだ幸ですが、随分墮落して故郷に歸り度くても歸れぬ、淺間しい人間になつて了ふものさへあります。

成程都會の生活は、其の賑やかな點で、其の便利な點で、芝居や活動等の見たり聞いたりするもの、數々ある點で、とても田舎の生活と比べものになりません。然し之はたゞ表面の見方で、都會生活の全部ではありません。

都會の表通りの華かなのに比べ、其の裏には、それこそ田舎では見當もつかない、目もあてられぬ惨な生活が潜むるのであります。

人は多く都會の表だけを見て、其の裏の暗黒面を忘れて居ります。都會生活のよく見えるのは、其の光明の方面だけを見るからであります。

今都會には求めても職がなく、食へるに食もなく困つて居る男女は幾萬と居ります。かうした場合、其の日其の日になすべき仕事を持つて居る田園の人達は、どんなに幸福と言へるかわかりません。

國の大御寶と生れたあなた方は、自分の何處に感謝しなければならぬことがあるかを忘れて

はなりません。働いてよれた手足は拭けばきれいになります。併し都會の悪い空氣で汚れた心は、容易に清められません。あなた方は清淨な田園に生きる事を感謝し、よりよき楽しい農村を作り上げるやう、努めてゆかねばなりません。感謝しつゝ生活して行くことが、心の園に花を咲かせることになります。世の中に農業を賤しい職業であると思ふ人がありましたら、其の人こそ却つて自分の人格を傷つけるものであります。

内村先生と光園公

キリスト教界の重鎮であつた内村鑑三先生は、

『世に高貴なる業が二つある。一は人の心を養ふことで傳道である。他の一は肉體を養ふ事で即ち農業である。前者は饑ゑた靈魂を養ふためであり、後者は饑ゑた肉體を養はうとする。此の二があつて國家があり、社會があるのである。二つの内どちらか其の一を缺いたなら、政治もなければ商業もないのである。人は其の基を農に置き、其の生を徳につなぐものである。ほんとの農業はほんとの宗教の兄弟である。』

と農業を讚美してをられます。

尙武家が全盛を極めて、農民を穀物を作る機械の如く見てゐた時も、賢明な水戸の光圀公は、農民の人形を作つて、食事の度に此の人形に先づ初穂を供へ、

朝な夕な飯食ふことに忘れじな

恵まぬ民に恵まるゝ身を

と云ふ歌を作つて、農民の勞苦を思ひ、何時も農民に感謝して居られました。

あなた方は顔の青白い、腰の細い、瘦形の婦人を眞似てはなりません。あなた方のその純な心に、そのはち切れさうな赤い頬に、本當に女としての美しさと誇とがあるのです。自然に育てられ、自然と共に榮え、自然の懷に抱かれて生きて行く、——人の世の生活に、是に越した幸と恵が他にありませうか。

三、明るく、優しく、朗かに

子供をいぢけさす家庭の罪

見なれない人の顔を見ると、恐ろしがる子供があります。抱こしようとして手を伸すと、逃げてしまつて、果ては泣き出す子供があります。自分の家ではやんちゃな癖に、一足外へ出ると、返事一つ出来ない子供があります。

そんな子供に限つて、何だか怖けたやうな顔をして、横目で人のする事をじつと見つめてゐます。

無邪氣で、明るく、天真爛漫でなければならぬ子供が、どうしてそんな表情をするのでせうか。そこに我が國の家庭教育の缺陷があるのではないでせうか。暗い窮屈な教育が子供の喜びを奪ひ、子供の心をねぢけさせてしまつたのではないでせうか。例へば、子供にとつて一番楽しい筈の食事の時が、母親の叱言を聞く時であり、父の心配さうな顔を見る時であり、兄弟達の不満を聞く時ではありますまいか。或は一部の家庭の子供達にとつては、きちんと坐つて、恐る恐る父母の顔色を窺つてゐなければならぬ時ではないでせうか。

かうした面白くない、暗い家庭で、子供の心がともすればひがみ、或は兄弟喧嘩を始めるのに何の不思議がありません。純眞な子供の魂を傷つけるものは、誤つた家庭教育の罪です。從來

の家庭教育は子供の心を忘れて、大人の通りにしようとする傾向が、大分に含まれてゐます。假に父も母も、兄も姉も、食卓を圍んで面白い話に花を咲かせたとしたら、よし山海の珍味はななくとも、どんなに美味しく食べられるでせう。單に子供だけと限らず、家中がどんなに明るく幸福であり得ることとせう。

日本婦人の淋しさ

外國人が日本の婦人を見ると、何の表情もない人形のやうな感じがすると言ひます。私共が見ても、感じがあるのかないのか、わからないやうな人があります。殊に交際なれない入の間には、無表情なきつい眼の人を見受けますが、之は昔からの堅苦しい家庭の習慣が、勢ひかうした表情に乏しい婦人を作り上げたのでありませう。

昔の家庭では、婦人の身だしなみと云ふことは嚴格すぎる程でした。先づ朝起きたら、顔を洗ひ薄化粧をしない中は、人の前に出ることは鏡のないものとしてありました。障子や襖の側では、必ず軽く咳拂をして、中に入る人を不意に驚かさないう様に於て部屋に入るのが禮儀でした。これは今日、先づドアをノックしてから、部屋に入るのと同じです。起居、動作、言語、すべて淑かである我が婦人の昔の風習は、たとへ表情に於て明るさに缺けてゐるとは云へ、大和撫子の美しさを持つて居りました。ところが近頃此の淑かさが缺けて來たのではないでせうか。まるで家庭生活と縁の遠いやうに考へられる歐米婦人に、髪を整へるにも洗面するにも、必ず窓をしめるとか、カーテンを下すとかして、人に直接見られぬ様にするなど、日常一寸した處にも奥床しい禮儀のあることを忘れてはなりません。

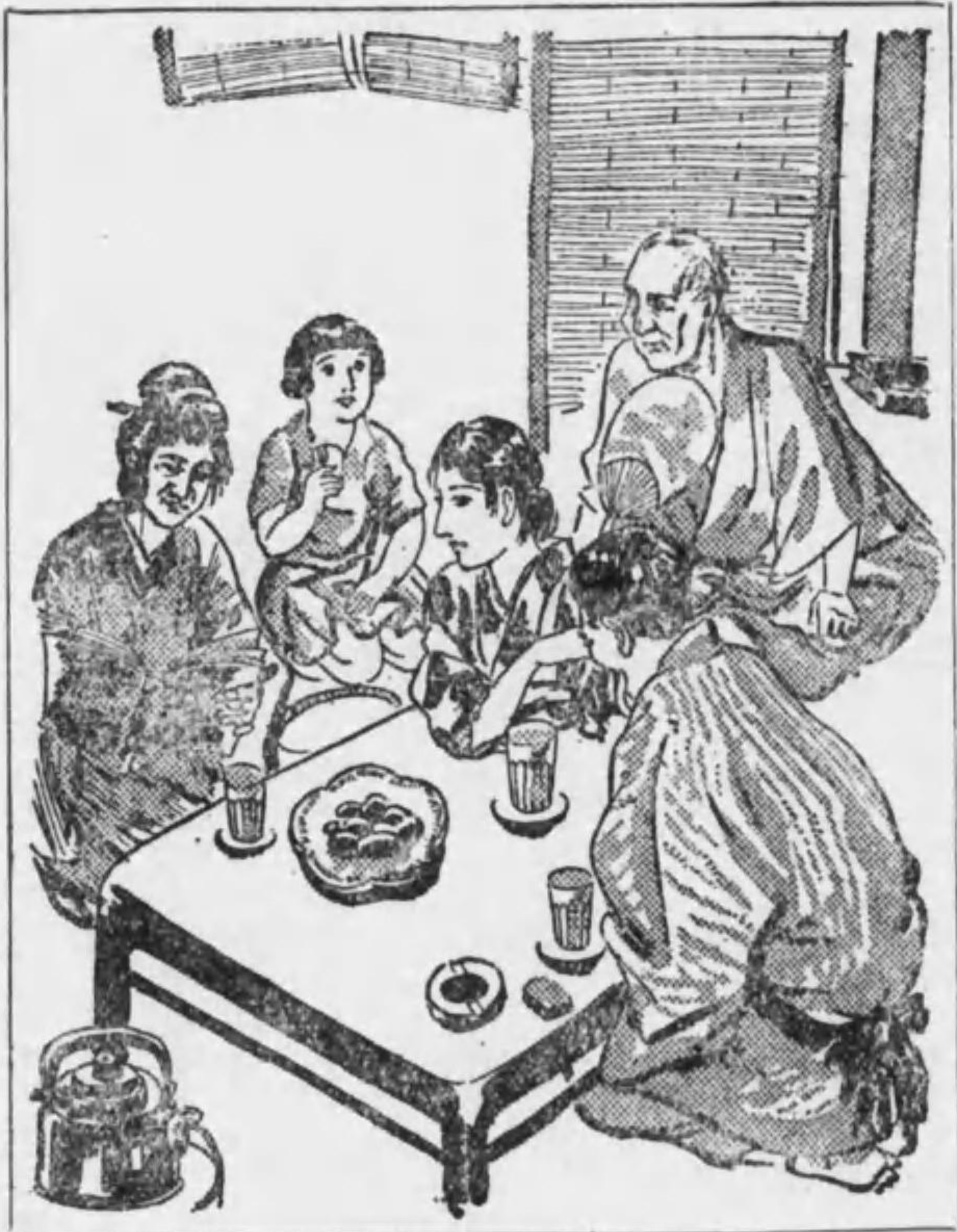
淑かきの上に明るさを

態々人に見せようとする爲でなく、女のたしなみとして、いつも姿を相當に美しく作り、快活で、にこやかであつたら、自然と誰もよい感じを興へられるに決まつてゐます。それを若いお婆さんであつたり、急に見違へるやうに美装したりするやうな氣まぐれ者は、誰が見てもあまり感心出來ません。そんな人に限つて、又人に優しくしようとする氣もなく、人に物を云ふにも理窟染みたことを言つたり、相手の氣持を悪くするのもかまはない人があります。姿が整ひ、淑か

あつたら、それで禮儀作法に適つた婦人であると云ふのは、昔のことで、今日は更に朗かな明るい表情を持つ婦人でなければなりません。

明るい表情は心の爽やかな人でなければ出来ません。愁ひを持つ人、悲しみを好む性質の人に明るい表情は心ならずも微笑を湛へてゐることがあります。歐米では若し自分に不快なことがあつても、眼には相變らず微笑を湛へてゐることが、交際上必要なことゝされてゐるさうであります。之に反して日本人は、大抵芝居でも小説でも、心ゆくまで泣かされるものでないと満足しません。歐米人は大抵晴やかな愉快な劇を見て心ゆくまで笑ひます。一日の疲れを療すために、一は悲劇を選び、一は喜劇を選ぶといふ全く相反した國民性が、その表情にも陰陽を作つてゐるのでありませう。

自由で明るい歐米人と、窮屈で暗い東洋人と、お互ひに一長一短はありませうが、兎に角私達は、これまで嬉しさも悲しさも抑へて来たことから、抜け出して、今少し朗かな家庭、明るい社會を作り度いと思ひます。せめて夜でも、一時間なり二時間なり、週に土曜の晩とか、日曜位はゆつくりと寛く暇を設けて、一家團樂のひとときを送りたいものです。殊にわが國のやうに娛樂の施設のない家庭では、不自然な媚態でなく、明るいにこやかな表情を持つて、家庭を朗かな慰



若き女性に贈る

安所にすることが、これからの婦人にとつて、何よりも尊いことでありませう。

四、青年女子の讀

書について

書物は讀みさへすればよいか

此頃のやうに世の中が複雑になり、絶えず動いてゐるときは、此の世に生きてゐる限りは、一通り社會の

大勢を知つて置くと言ふ事は、極めて必要な事でありませう。之には讀書が何よりも必要であるといつてもよいと思ひます。併したとへ家に萬巻の書を積み、それを讀むでも、之を實地に應用しなかつたら、決して讀書の使命を果したと言ふことは出来ませう。本を讀むといふことは、内容をよく玩味して、自分の血となし肉とするものだと言ふ、大きな考が徹底して居らねばなりません。書物を唯讀むばかりなら、寧ろ讀まなくてもいい位であります。今日の青年男女の思想が動搖し易いといふ傾向は、單に讀めばよいといふ誤つた考へ方があるからではないでせうか。讀書が讀者に知識を與へるものであるとするならば、書物の選擇といふ事が肝要となるのであります。今日の一般青年男女の考へ方を忖度して見ますと、概して眞面目な、言ひ換へれば堅いものは避け、其の場限りのものとか、戀愛小説とかと云ふ風なもの、多く讀みたがるやうに思はれます。

今日の新聞廣告の大部分が、書籍の廣告であり、全く書籍雜誌の洪水で、その選擇に手も出せない様な有様であります。ところが此の澤山な讀物の中で、私共が見て困つたものだと思ふ様な記事に、讀者が興味を感じ、そんな本だとか雜誌に限つて、賣行がすばらしいと云ふ結果になつて居ります。又販賣業者も、此の點に目をつけて、益々讀者の興味を惹くやうに編輯して行くのであります。假に婦人雜誌を見ても我國程数の多い國はないといふ事でありませう。其上英國を始め文明國では、雜誌でも、男女何れにもよく又誰の前でも見られる、清淨なものがよく賣れるのであります。それに反して我國の婦人雜誌の中にはその内容が低劣な記事や廣告で埋められ、娘は母の前で、母も亦、娘の前で讀めないと言ふやうなものがありませんが、之は正しい記事でない證據であります。活動寫眞の本場である米國が、活動俳優の寫眞を載せた雑誌をさへ低級なものとして取扱つてゐるのと比較しても面白い事と思ひます。

書籍はかうして讀め

かう考へて來ると、私はあなた方が讀書をなさるときに希望したい事があります。それは行當りパツタリ式に書物を讀まず、鋭い批評眼を養つて、書籍を十二分に検討して、苟も不快なものがあるならば、絶対にこれを手にせぬといふ位の崇高な氣持で、讀書するやうにしたいと思います。そして内容のない見かけ倒し、つまりぬ書物を買ふことが既に氣まりの悪いことであると

いふ戒心を讀者が持つやうにならねばならないと思ひます。

書物の選擇は、斯様に難しいものであり、決して之を輕々にすることは出來ないのであります。が、同時に又如何に書籍を讀むべきかといふ方法も見逃してはなりません。之が如何にして書籍の中から、自分の血となり肉となるものを得るかといふ、大切な問題であります。前に申しました如何なる書物を讀むべきかと云ふ選擇の結果、讀むべきものを決定したならば、それを如何にして讀むべきかといふこの問題は、當然起らねばならないことであると思ひます。

書物に讀まれる人

元來書物は、讀むべきものであつて、決して讀まるべきものではないのであります。それにも拘らず兎角書籍に呑まれてしまふと云ふ傾向があります。その原因も期する所は、高い所に立つてその本を検討すると云ふ心の缺乏にあるのであります。夫故私達は先づ書物を讀む時には、よく内容を消化し、その中から血液となるものを攝取し、肉體を養ふものをとるやうにする事が大切であります。

昔の所謂『讀書百遍意自通ず』も悪くはありませんが、夫を今一步進めて、意が通じたならば、直ちに實行にうつして行けるやうにして置かねば何の効もありません。理論より實行といふ事は、何事についても必要であります。殊に讀書には此の考へが、極めて大切であります。かの二宮尊徳先生が次のやうに申されて居ります。

知るは之を行ふが爲なり、

知つて行はざるは知らざるに如かず。

これ實に讀書家の金言であり、私共の常に心せねばならぬ事でもあります。

一體従來の教育は實行といふ點に於て乏しい様に思はれます。これはお互國民がよく考へねばならぬところでありませう。斯様にして今日の婦人を見るとき、却つて昔の教育のない婦人に立派な婦人を見るのであります。

現代の婦人は學問をして居りますから、理窟をよく知つて居りますが、實行といふ點では昔に劣つて居るやうに見えます。昔の婦人は讀書こそしなかつたが、知つただけのことは有効に實行したものであります。此の點は私共の特に學ぶべき所で、讀書する場合も常に實行と云ふ點を念

頭において置きたいものであります。

五、表情と癖

明るい表情と交際

一口に表情と申しますと、わざわざいなをつくるとか、媚をあらはすとか、へつらふことのように思ふ人もあるかも知れませんが、——勿論さうした不自然な、下品な表情はいやしむべきものです——純な心から自然に發した、上品で明るい表情をもつといふことは、婦人が人に接する上に、何より大切なことであります。

一體我國の婦人は、昔から喜びとか悲しみの感情を表にあらはさないやうにしつけられて來ました。これでもあまり極端だとは思ひますが、それかといつて、嬉しいからと無暗に喜び、口惜しいからとすぐ顔色をかへ、悲しいからと僅かのこと泣いたり、楽しいからとやたらにはしやぎ廻る——つまり我を忘れて度を越えるといふことも、つゝしまねばなりません。

感情を表にあらはさないやうにといふ永い間の習慣は、日本の女性としての美しい『慎しみ深さ』を形作りましたが、其の反面には、冷い感じを持たせる無表情の人も多くなりました。

例へば快活であるべき處女時代でも、先輩の前でると、妙に堅苦しくなつて黙つてしまつたり、何か面白いことがあつても決して愉快さうにしないといふ、不自然さをもつてゐる人があります。

折角久し振りに人に逢つても、嬉しいのか、悲しいのか、怒つてゐるのか何だかわからないやうな態度では、話をするのにも誠に張り合ひのないものではありませんまいか。

寒い日に人を訪れた時、『さぞお寒かつたでせう』と申された時、正直に『外は随分お寒う御座います、あまり御無沙汰いたしましたから、今日は是非お目にかゝり度いと存じまして、お伺ひ致しました』といへば、尋ねられた方では、どんなに嬉しいこととせう。そこへ、お火鉢でも出されると、手をかざして『お蔭様で温まりました』と、萬事かういふ調子でゆけば、世の中のおつき合ひはほんとに楽しく美しいものになるのではないでせうか。

寒い時に、むやみに寒がるのも、つゝしみのない事ではありますが、『お寒かつたでせう』と言は

れても、やせ我慢で「いゝえ少しも寒くありません」などいつて、ちびんでゐるなどは、見苦し
いものですから、もつと素直な朗かな態度でありたいと思ひます。

姿のくせ心のくせ

俗に「なくて七癖」と申しますが、人によつて大なり小なりの、いろ／＼の癖を持つて居りま
す。折角上品な風采をもちながら、頭や肩や足などをゆすぶつたり、鼻にしわをよせて高笑ひを
するくせ、相手を正面に見ないで、横や下を向ひて話をする癖、その他いろ／＼ありますが、わ
るいくせは、非常に人に不快な感じを與へるものであります。

かういふ癖は、本人自身には、割合に気がつかないものでありますから、お友達同志とか、家
庭の人同志とかで、お互に注意し合つて、少しづつでも矯正するやうに努めるのがよいと思ひま
す。また人の癖によつて、自分にもあのやうな悪い癖はないであらうかと省み、悪いことに気が
ついたら、直ぐ改めるやうに努力すれば、自然に悪い癖は除かれて行きます。

これは母としての心懸けであります。母はその子供の幼い時から、そのいろ／＼の癖に注意



若き女性に贈る

して直させるばかりでなく、
出来るだけ整つた人柄や、
上品な表情、優美な言葉づ
かひなどを自然にもつやう
に、氣をつけることです。
これには母としての修養が
大切で、従つて處女時代か
ら修養して置く必要があり
ます。
西洋の母親は實によく子
供のために、かういふ方面
にまで注意して居り、幼い
時からお客様へのお給仕の

役を手傳はせたりして、その態度などについて、適當に直してゐるやうです。或る方がアメリカを汽車旅行された時、その方の前に黒人の子供が洗面所へ入りました。日本の子供であつたら、大抵邊りを濡らしたまゝにして洗面所を出るのでありませうが、どうでせう、その子は洗面器の周を奇麗に掃除して出たのです。黒人の子でさへ是です。私共は子供の時分から、よい習慣をつけるやうに心がけたいと思ひます。

婦人には、おしやべりのくせをもつた人が多く、人の多く集まつた場所などで、むやみにおしやべりをするのは、誠に見苦しいものです。又その反對に、むつとりとして、人をじろく見廻したり、もちくしたりするのも餘り見よいものではありません。

實際辯をなくするといふことは、出来ない事でありませうから、同じやうにある辯なら、出来るだけよい心の辯、姿のくせを持つやうに注意して参りませう。

六、女學校を卒業してから

家庭は學校、母は教師

家庭でなければ出来ない躰けは別として、物を教える事は、大部分兎に角學校で受持ちますから、子供の女學校に通つて居る間は、母はまだく樂でありませうが、いよく女學校を卒業して、嫁入りをする迄の間は、母として更に教師の役目までも兼ねなくてはなりませんので、一通りや二通りの骨折ではあるまいと思ひます。女學校を卒業しても、裁縫などはまだく未熟であり、割烹に致しまして、大方は筆記位に過ぎませんから、本當に之を活用する實地練習は卒業後にあるのであります。

それに女の子は、お嫁に行つた先方次第で、どのやうな家を持つか分りません。行くときは十分注意して、實家と大した相違がないやうに思つて居りましても、測り知れぬのは人の運命でありますから、たとへ如何なる變化があらうとも、それにつけて適れ働きある主婦として家事を執り得るだけの躰けをすることが肝要であります。

以上のやうな譯で、家庭は女學校卒業後の學校の様な位置になつたのに、教師たる母の心に、子供の教育に一定の順序も方針もなく、ウツカリして居りましたなら、イザお嫁入と云ふ時に、これでは世間見ずで困るとか、あれもこれも未だ思ふ通りに出来てゐないとか、まごつかねばな

らないと云ふやうなことになるかも知れません。

娘に教へたき色々

それ故學校を卒業してから、母が教へなければならぬ事について、段々考へて見ますと、大方次の様なものであらうと思ひます。私の學校の家事科（女學校を卒業したものをいれまして二年で卒業致させます）などでも、大體此の見當で致して居ります。

- 一、金錢出納のこと
- 一、日用品の買入方
- 一、家族の衣服の始末及び見積り
- 一、日々の献立
- 一、贈答品の選定及び吉凶による水引の掛け方、熨斗の遣ひ方等のこと
- 一、來客の接待及饗應の仕方
- 一、訪問及び服裝

- 一、室内裝飾及び整頓法（掛物、生花、火鉢、戸棚等の取扱整理始末等）
 - 一、勝手下水等の清潔法
 - 一、一日、一週の用務配當
 - 一、一家經濟の大略
 - 一、洋服の手法及び始末
 - 一、幼兒の保育法
 - 一、婢僕の使用法
 - 一、納税
 - 一、諸届書のこと
 - 一、爲替及び小包郵便等に關する心得
 - 一、銀行並に郵便貯金のこと
 - 一、親戚知人間の交際法
- 先づザツト此の位の事は必要と思ひます。

家事練習の大切なわけ

金銭出納に就いても、考へもし経験もして見ると、矢張それぞれの道があります。少しの金であるからといふので、粗末にすれば、結局一家亂雑のもとになります。日用品の買入も上手にしなければ、一家の経済の非常なる打撃であります。贈答品の選定も、勉めて一人でやつておきませぬと、何も知らぬ處へ急に其の様な場合に出會つてまごついたり、吉事も凶事も區別なく、うつかり水引や慶斗を間違へて、飛んだ失策を演じないとも限りません。

器具の取扱ひ方なども、何でもないやうなもの、取扱ひのよしあしに依つて、早く損じたり、知らぬ間に役に立たぬやうになつて居るなど、往々ある事でもあります。室内裝飾なども非常に上手下手がありまして、同じ一幅の掛物又は生花にしても、何でもないものが大層引立つものでありますから、かねて様々に練習させて置く事が大切と思ひます。

納税のこと諸届のことなども、一通りは心得て置きませんと、イザといふ場合に、他人に尋ねたり、書式を繰つたりして居る間に、飛んでもない間違ひを起すことがないとも限りません。貯金の事や、利息のことなども亦、経済の上に大いなる關係のあることですから、十分に教へておきたいものであります。

慣れない者に家事をさせることは、却て自身にするよりも骨の折れることですから、母親は新に教師の役目まで加はつたと覺悟して、まづ初めには簡單なことから、自分の仕事を娘に代つてさせ、丁寧に教へたら、必ず十分に呑み込むに違ひありません。

低い生活に慣れよ

次に新しい家庭を持つとしたなら、何うしても親の家よりは、収入も少く、従つて萬事が少ないものと見なければなりませんから、母はその心で練習させねばなりません。とかく生活といふものは膨脹したがるもので、縮めるといふことは難しいものですから、特に注意して心懸けて置きたい事があります。

殊に今日のやうに経済界が行詰つてゐるときは、若い人達の収入も極めて少ないもの故、大きく慣らされてゐて、急に小い家を持ちますと、或はそれが爲に、不平の念が起らぬとも限らず、左

様でないまでも、今まで大きくバツバツとつかつて居たのが、縮めねばならぬ爲、非常にやりにくくもあり、苦痛を感じる事と存じます。この事は今日の母としても、又娘としても、特に充分考へて置いて欲しいことでもあります。

七、嫁ぐ女性に

大切なのは結婚前の用意

この頃は『身の上相談』といふことが流行して、しきりに新聞や雑誌に掲載されますし、私の處へなども、殆ど毎日のやうに、種々な相談の手紙がまゐりますが、その主なものは、大抵結婚に失敗した人達のものであります。

世間には誰しも、不幸にならうと思つて、結婚する人はありません。美しい希望や、憧れを抱いて、華かな結婚生活の第一歩を踏み出した人達が、不幸にして思はぬことに直面するやうになつて、途方に暮れてゐるのであります。然し全く豫期し得なかつた災難は兎も角として、今日で

は、結婚法も可なり進歩してゐますから、その用意の如何によつては、結婚後の不幸も招かすにすむかと思はれます。

心の眼を正しく

昔はよく政略結婚とか、家と家との結婚といふ様なことが、行はれてゐましたが、昭和の今日では、結婚は人と人との結婚であるといふ思想が、可成人々の間に徹底して來たことは、誠に喜ばしいことであります。この人と人との結婚といふことが出来る爲には、若き男女は、よき監督者の指導の下に、お互が異性を見る正しい眼を、養つて置かねばなりません。このことは結婚前の男女には特に必要であると思はれます。両親や年長者の眼で相手を見ることも勿論大切でありませうが、根本は娘自身が、結婚の當事者であるといふことを忘れてはなりません。家同志が結婚するのでもなければ、親が嫁や婿をとるのでもありません。何よりも當事者がそのよしあしを判断し、随つて責任も持たねばなりません。

相手の男子を選ぶには、女子の立場からは、先づ第一に相當の知識を持つ人でなければなりません。

すまい。どんなに家柄がよくても、財産が有り餘つてゐても、その夫が無知であつたなら、到底楽しい生活を送ることも出来ませんし、又一生の伴侶として、共に暮して行くことさへも面白くないでありませう。

第二には獨立して暮して行けると云ふことが必要であります。勿論妻子を養つて行けるだけの働きのない人は、結婚する資格のないものと思はねばなりません。殊に『あの家の娘さんを貰つたら、月々補助して貰へるだらう』とか『持参金があるだらう』とかいふ様な、さもしい心で結婚する意氣地なしの男が、世の中には随分あるやうでありますから、よく注意して欲しいと思ひます。殊にこんな場合に補助とか持参金の當がはずれでもしようものなら、その男は掌を返す態度をとるに違ひありません。

時にはこんな悲劇も起る

第三には身體の健康な人であることを要します。それには相手の人の血統を知る必要があります。せうし、又少くとも祖父の代あたりからの生活を調べ、遺傳の有無などを知ること大切であり

ます。

私の知つた人ではありますが、よい家柄の立派な方と結婚しました。所が既に子供の二三人もある今日になつて、その夫は氣狂ひのやうになり、怒り狂つて妻子にあたり散らすかと思ふと、急にやさしくなる、又時々デパートへ行つては、やたらに種々なものを買ひ集めて家へ運ばせるので、奥さんは後からお説を言つて返しに行くといふ有様ですから、その奥さんは毎日子供を抱へて今後の事を苦しんでゐるといふことであります。この人など、結婚當時は、その家は由緒のある家柄であり、夫は立派な人格者で、非常に幸福であつたのですが、夫の祖父にあたる人が、大變放蕩な大酒呑であつたため、その悪い毒が罪もない孫の時代になつて現れ、その一家を苦しめてゐることが判りました。

此の事實を見ても、本人の性行を知ることが最も大切であります。同時に少くとも、二三代前からの生活をも、出来るだけ精しく調べることが必要があるといふことを、特に未婚の女性は自覺されたいと思ひます。

更に最も注意しなければならぬ事は相手の人格であります。尤も完全とは行きませんが、

夫たる人は人格者でありたいものです。

決して家柄とか、地位とか、名譽等と結婚してはなりません。先づ夫たる人の人格如何を見る事が必要で、それにはその人の平素の行爲や趣味を知り、親しい友達はどういふ風な人であるかをも調べねばならないのです。

かくて、度々つき合つてゐる内には、相手の人の自然の言語動作の中に、それが窺はれませうし、又その人の家人を見ても、その人となりか略解することゝ思ひます。

娘時代は兎角心が熱し易く、冷静に物を見る眼に乏しい時でありますから、浮つかないで、成るだけ落ついて、あらゆる方面から相手の人を見直して見る必要があります。まして一時の感激や、一度の見合などで、輕はづみな結婚をしてはなりません。

輝きある人生を求めこ

又世間ではよく「嫁を貰つたら放蕩が止むだらう」といふ様なことを聞きますが、一個の人格者である女子が『浮氣止めの藥』と一緒にされるやうな結婚は決して行ふべきではありません。か

かる人と結婚すれば、悪い關係が續いて居つたり、或は病毒を受けて一生泣かねばならぬやうな不幸に陥ることもあります。

一旦結婚した以上は、既に承諾して嫁いだのでありますから、よかれ悪しかれ妻たるものは自分で責任を持たなければなりません。つまりその家を『死ぬまでの家』としなければならぬのであります。そして又家が貧しければ榮えるやうに、夫の家人によくない所があつたら、それを正しくする様に、暗い家は朗かにし、自分が總ての責任を負つて、よいものにするだけの覺悟が肝要であります。誤つた結婚、不幸な結婚は、その人一人の不幸ばかりでなく、一家の不幸であり、延いては國家社會の不幸であるといふ事を、よくよく心得て、よい結婚をし、よい家庭を作り、それによつて更に國家社會に貢獻するやうに、心懸けて戴きたいものであります。

八、餘暇を生み出すには

忙しい人と閑人

西洋の諺に『用事を頼むなら、一番忙しい人に頼め』といふのがあります。これは全く眞理であつて、種々の仕事を多く持つ忙しい人は、常に気分が緊張して居り、多くの用事を次から次へと、極めて手早く順序よく片づけて行く事が出来ますが、暇の多い人は精神が緩んで、時たまに起る僅かな仕事でも、こんな面倒なことは容易に出来るものでないといふ氣持で、あとまはしにして、なか／＼片づかないのです。こんな譯で忙しい人はかねて時間割や日割などを作り、それに従つて、朝起きた時から夜床につくまで一日中、始終緊張して居る、一時間も無駄にすまいと、有効に使ひますから、僅かの時間に澤山の仕事が出来て居るわけでありませう。

もし一家の主婦が非常に忙しく、時間を有効に使ふ人であるならば、その家の中は常に整頓されて居ります。そして又そうした主婦なら、多くの仕事をすると同時に、必ず自分自身を修養す

る時間も見出しませう。

今日の多くの人々の口に慣れた言葉は、『忙しい／＼』といふ言です。『忙しくて新聞を読む暇もありません』といふのが日常の挨拶です。何がそんなに忙しいのでせうか。忙しい忙しいといふばかりで、自分で實際に手を下し、限られた時間を上手に利用して、仕事を順序よく、素早く片づけることに、平常から訓練されて居ないからです。

『小人閑居して不善をなす』

と孔子も教へて居ります。口先だけの忙しさは、とかく井戸端會議や近所隣の婦人同志のつまらぬお饅舌の基となつたり、有閑婦人として人の口の端に上る基となるのであります。

今の主婦と昔の主婦

主婦は朝、夫を仕事に送り出し、子供を學校に出した後、臺所の後仕末や、部屋々々の掃除をすませ、それから洗濯をするとか、日用品の買出しに行くとか、前以て決めておいたプログラムに従つて、手早く仕事をすませるならば、午前中の頭がまだはつきりと澄んでゐる時に、主婦自

若き女性に贈る

らの修養の時間を求めることが出来るのであります。午後は裁縫なり、其の他家の仕事をし、又日によつては人を訪問したり、されたりすることもありません。

こんな具合に家庭の中の仕事を手際よく、比較的短時間に片づけることを心懸け、その餘力を以て家庭の幸福の爲なり、或ひは女子青年團や、婦人會など、公の仕事なりに盡すことは、現代の婦人として大切なことと思ひます。今迄の婦人はこれらの事業にあまり關係しませんでした。といふのは今迄の婦人は家庭の仕事があまりに多すぎ、同時に又組織的でなかつたからであります。現今の婦人は主として消費のみを事とするのに反して、昔の婦人は消費のみでなく、生産の方まで自分の手でしなければなりません。綿を紡いで糸をとり、それを染めるなり、染めさせるなりした上で、これを織るのも主婦の務でした。その布を裁つて仕立て、家内中の者に着せし、主人の羽織袴の折たみから、結髪月代までして居りました。食物などでも味噌醬油に至るまで、主婦の手を俵つて醸る家が多くありました。現在の主婦のして居る仕事の上に、以上のやうな生産のことまで、一手に引き受けて居たのが昔の主婦であります。

それに比べて現在の主婦は、かなり時間のゆとりがある筈であり、又知識が進んで来たのですから、巧にゆとりをつくり得る譯であります。

考へれば生まれる時間の餘裕

お名前を申せば、どなたでも御承知の某大學教授の御家庭では、御主人は教授のかたはら、著述なども多くせられ、夫人も亦女學校の教諭であり、其の外公共事業にも力を盡され、其の上まだ小さいお子さんが二人までおありなのに、女中などは一人も使つて居られません。その方の御話を伺ひますに、朝お起きになると、御主人は掃除を、夫人は炊事をそれ／＼分擔して行ひ、その中お子さんの目が覺めれば夫人はその世話をなさる。教授は一日中の都合のよい時に、自身で日用品の買出しに行かれます。

「公私のお仕事に忙はしく、寸時も惜しい時間を割いて、買出しに行かれるのなんかは、随分つまらないではありませんか。」といふ人があれば、教授はよく次の様に話されます。

「大抵の人が、一日の中に一度は運動のため散歩に出かけませう。その散歩の代りに買出しに行くのです。同じ歩くにしても目的がなくてはつまりません。買出しといふ目的があれば、散歩



がより愉快になるのみならず、用事が出来一舉兩得です。妻にしても、不経済な無駄づかひをする女中を使つて、頭をつかふより、自分の身體を使ふ方が、自體は丈夫になるし、氣が樂で身心の浪費がどれだけ省けるか知れません。『すべて頭を働かして、時間を有効に用ひ、常に緊張した氣分で仕事に當れば、自己の修養に當てる時間は、譯もなく

出て参ります。

時間の餘裕はかうして生かせ

以上のやうに考へれば出来る時間の餘裕も、お饅舌や晝寝に過ごしてしまへば、何にもなりません。此を婦人としての修養なり、社會公共のためなり、或は家庭の利益を圖る爲に使つてこそ、始めて意義深い事となつて参ります。今では何處にも、女子青年團や婦人會が出来、世間でも婦人の活動を非常に期待して居るのであります。

今の婦人が時間を割いて、社會公共の事業の爲に費すやうになつた事は、非常に結構なことであります。之も自然婦人の存在が社會に認められて來たからであります。婦人がそれらの事業のために働くといふことは、一つには社會のため、人のためであります。また一面から考へて見ますと、なるべく多くの事に接し物に當る中に、自ら常識が發達し、自分の體験も豊富になつてゆきます。これも一つの修養でありまして、忙しい人が大切な時間を割いて公共事業等に盡す時の、大きな副産物であります。かうして得た常識と體験とは、夫を助ける上に、子供を教育

する上に、非常に大切なものであります。

婦人が社会事業等の爲でなくとも、家庭の外で働きますときは、精神上には上記のやうな利益を得ますと同時に、物質的にも、幾分の収入を得ることが出来、家計の補ひになることもありませう。又かねて自分の得意とする學科とか、裁縫とか、音楽とか、お茶とか生花などの藝道でもよろしいでせうが、何か人に教へることによつて、幾分なりとも世を益することも結構なことと思ひます。

今迄の婦人のやうに、忙しいくと多忙に追はれて居らず、一家を治め、家族に慰安を與へた上、時間を作つて、自己を修養するなり、社会の爲に働くなり、又は幾分なりの収入を得るやうに努めるのがよろしいので、之が又婦人の地位を強めて行くこととなりませう。

九、貞操觀念に就いて

貞操を守る喜び

如何によい事を知つて居つても、之を實行することがなければ、本當によく知つて居るといふことは出来ません。君には忠義を盡し、親には孝行をすると云ふことは、小さい時からよく教へられて居りますが、其の本人が如何にもさうであると感じて實行するでなければ、忠臣にも孝子にもなれぬと同様に、貞操も如何に他から強ひられても、青年男女の胸に深く刻み込まれた強さがなければ、どうすることも出来ぬのであります。

人としての貴さは、人格の美しさに勝るものはありません。人は此の人格を磨く爲に、種々の欲情を抑へ、その向上をはかつて居るのであります。若しも人が人格の貴さを覺らずに、自分の慾望を思ふがまゝに達けて行くやうでしたなら、「己の欲する處に従へども而も規を越えず」とまで進んだ人格者でない限り、大抵は人としての價値は失はれるに違ひありません。犬や猫のやうに次から次へと轉々として行く状態が、若し人間界にあつたとしたらどうでせう。人としての貴さもなく、世の美しさもなく、清い愛もなく、眞につまらぬ世界となるでせう。

人生の幸福も喜びも、一生涯に唯二人の男女が互ひに少しも包み隠す所なく、心から信じ、愛し合ひ全く自己の半身として清く交ることによつて、湧いてくるのであります。そこにこそ人に

のみ恵まれた一夫一婦の貴さがあるのであります。

文化と貞操

人智が進めば進むに従つて、貞操に對する自覺が出来るのは當然であります。私の知人にイギリスで相思の間柄から婚約だけすませた人達があります。双方共にあまり豊かでない人達でしたので、相當の收入があるやうになつてから、結婚しようと言ふ譯で、婚約後十二年も経つたのであります。大抵にして結婚しなければ、お互ひに年をとつて仕舞ふではないかと、他から氣を揉んで勧めると、

『いや、結婚すると子供が出来ると見なければなりませんまいが、到底我々の今の收入だけでは、子供が生れても育てることも、教育することも出来ませんから。』

と、十二年も清い交際を續けて居るのであります。彼の國では結婚する資格のある男子とは、家庭を持つて妻子を養ふ義務を果すことの出来るものとしてあるからであります。それにしても此の人達の自己を守る事の強さは、私共として大に學ばねばならぬ所であります。

然るに我國の此頃の男女はどうでせう。お互ひに未だ結婚すべき資格もないのに、輕卒に許し合つて仕舞ひ、若し思ふやうにならぬと、見苦しい舉動に陥つたり、甚しきは心中するといふ事さへ流行しだしました。

これは一には克己心に乏しく、短慮であるからでもありませんが、一はお互ひの貞操觀念が乏しいと云ふ點から起るのであります。殊に我國の男子には未だ貞操觀念が充分に徹底して居ることは申されませんから、女子の方から特に注意しなければなりません。昔から日本の婦人は貞操は生命より重しとする氣概を持つて居た事は、あなた方によく御存じの事と思ひます。

貞操と子孫の幸福

男女が結婚してから、妻は夫の、夫は妻の、結婚前の貞操の正しかつた事を知つた時、そこに夫婦の愛は泉のやうに湧き、家庭生活の幸福は招かずして得ることが出来るのであります。そして此の純潔なる二人の間に生れた子女は、云ふ迄もなく心身共に善良に育つに違ひありません。自分一人の心のおきどころ一つで、子孫永遠の幸福をも左右するものであることを思ひます時、

若き女性に贈る

徒らに自分一人の享樂を追ひ求めることの誤をさとり、自己の信する所に進んでこそ、始めて人生の尊さがあります。

一〇、犠牲的精神の輝き

犠牲的精神の尊さ

人間の價値が單なる地位や名譽や、黄金の多寡によつて誤られ勝ちとは云ひ乍ら、人が人として世に處する爲には、犠牲的精神の大小に依つて、實際の價値を決することが極めて妥當な場合が少くないと思ひます。此の犠牲的精神を發揮することに依つて、私達は眞に人らしい人になり得るのであり、その精神の強い程尊敬に價すると信するのであります。親子の間の美しい事も、悉く犠牲的精神の現れであります。

最近見聞した話でありますが、母親が三十六歳で夫を失ひ、以來二十年間、再三再四持上る再婚説に耳も藉さず、終始一貫三人の遺児を立派に成長させ、夫の遺言を果すべく努め、遂に自分の職業も美しい實を結び、子供も亦夫々父の遺言なり母の苦心を身に體し、刻苦精勵して居ると云ふことであります。之とても實に美しい犠牲精神の表れでなくて何であります。

古歌に

我がせこは物な思ひそ事しあらば

火にも水にも我なけなくに

と云ふのがありますが、つまり妻としてのけなげな覺悟を現はしたものであり、夫の爲全く我が身を忘れて、水火の中をも厭はずに盡すといふ、熱烈な精神を現したものであります。斯様なことを申すと一部の婦人の中には、夫の死後若い身空で子女の養育に専念して、自分の爲に何等の時を持たぬことを以て、何か大變損でもした様に考へ、こんな場合には、子供を他人にでもやつて身一つになり、再婚するのがいと説く人もあります。勿論、事情によつてはそれも結構でせう。然し、他人の所へやつた子供の事を考へたら、先づ良き母として見直す必要はありますまいか。元來婦人の特長として一心に物事をつきつめて考へる、その眞剣さこそ何物より尊いものと云へるので、而も何事によらず一心に其の事に當ると云ふことは、非常に強いものであり、此の

度の北陸の水害でも、愛児を抱きしめた母の死骸が発掘される等、恐ろしい母の愛となつて現れるのであります。

民が君のため、親が子のため、妻が夫のために、全く我が身を忘れて盡す其の迫力は、何物をも熔かさねば止まない強いものがあるので、此に諸外國婦人の眞似られぬ美點があり、我々日本婦人が諸外國婦人の中に優れた所以も亦實に此處にあるのであります。

女らしい自由

女子教育が男子の教育と同様に盛んであり、自由平等、男女同権を叫ぶ米國婦人の中には、家庭を持つことを以て、男子に對する服従の一步であり、それは同時に自己の享樂を失ひ、社會に對する自分の名譽心を満足させることが出来ぬと思ひ、男子と同様職業に従事し、在來の主婦の如く影で働くことは不可なりとする者もあります。

併しながら、天地に陰陽の別があると同様、男女の間に矢張その別があります。婦人にも自ら婦人として爲さねばならぬ務めがあり、又婦人でなくては出来ぬ仕事があります。我國の婦人は



若き女性に贈る

昔から『女らしさ』と云ふことを尊び、婦人としての本分をよく心得て居りました。斯様な點は兎もすると、婦人の自由を束縛するものと考へられ易いのであります。が、女らしさと自由とは必ずしも兩立しないものでなく、男子のやうに自由自在に飛び歩いたり、大聲で言ひたいことを言ふことが、眞の自由であるとは申されません。女らしい自

由、それは決して不可能な問題ではないのであります。

若し今日の婦人がこの誤つた思想に捉へられ、男子と同様戸外でのみ働くことを好んで職業第一主義で押し進んだとしたならば、家庭は一體どうなるでありませう。母親の居らぬ家庭の子供は、如何に賢い乳母が居らうとも、決して家庭の暖味を感じるものではありません。夫も同様でありますから、家庭は知らずくの間は無味乾燥なものとなり、人生の慰安所たる使命も充分果し得ず、従つて家族は一體何處に慰安所を求めやうとするでせうか。結局婦人は家の土臺の如きものであり、家庭の柱石とも云ふべきで、外部で活動する夫をその背後より援助し、夫をしてその能率を充分に挙げさせ、子供の教育を完全にして、第二の國民として社會の爲につくさせる——此處に婦人としての本當の努力があり、價值があるのであります。

婦人としての務

之に反して米國婦人の或る者の如く、徒らに外で名譽心を満足させることばかりに努め、家を外にして飛んで歩くやうでは、到底家庭を圓滿に處理して行くことは出来ないであります。子

は母を見る機会も少く、學校から歸つても心から迎へて呉れる母もなく、夫にしても仕事に疲れて歸つても、にこやかに慰めて呉れる妻もないとしたならば、勢ひ外に樂みを求めるやうになるのも無理はないのであります。たとへ品行方正の夫にしても、妻の居ない冷い家庭に落着き得ないのは一理のあることでありませう。一家が家庭と云ふ太い綱で結びつかず、各々勝手氣儘に生活したなら、その兒が不良な傾向に走るのは、寧ろ當然であるといつてもよいと思はれます。世の中の嘲笑の的となつて居る様な家庭から、えて不良少年少女が出ると云ふのも、畢竟するに斯様な點が影響して居るのではありますまいか。確かに子供の教養上の大部分の感化は、多く母親自身から出て居るといふことは否み難い事實であります。

かゝる家庭の缺陷から、幾多の悲しむべき事實は米國に於てぞく／＼起きて來ました。これは小さな問題でなく、國家としても考へねばならぬ重大問題であると云ふので、大統領が婦人を家庭の柱として、家庭に歸らせるやうにと大に努力されたことは、有名な事實であります。それからあらぬか最近は大に改善されて、所謂家庭に於ける善良なる妻、賢明なる母として自覺しつゝあると云ふことであります。

之を思つても、我國婦人の犠牲的精神こそ益々尊ぶべきもので、世界に類の無いものでありませう。若し日本婦人の道徳中この精神を奪ひ取つて了つたならば、外國婦人との間に幾何の差が認め得られませうか。勿論婦人も一個の人格者として世に處して行かねばなりません、同時に又此の美しい犠牲的精神の輝には、益々磨きをかけるやうに努めてゆかねばなりません。

一一、自分を知るが幸福の初め

先づ自分の考へを持って

近ごろ世間が餘程贅澤に流れて参りましたが、贅澤といふことは生活の向上と平行して、自然に起るものであります。然し人はもともと虚榮心の強いものでありますから、さう云ふ世間の風潮の間に生きる場合は、餘程注意しなければなりません。

第一に必要な點は、自身の見識を持つと云ふことです。無暗に世間の流行や他人の好みにばかり氣を取られず、自分は自分の見識に従つて、萬事を處理するといふ風に致したいものです。自

分の立場や、夫の社會的地位やら、一家の經濟狀態などに就いて、確りした考へを持つて居りましたら、何事にも身分相應にして、しかも恥かしからず振舞ふことが出来るであります。

例へば他人が何を着ようと、世間でどんな物が流行しようと、自分は自分に相應した、自分の容貌や年齢に應はしいものを着たり、持つたりすればよい譯です。また會合の席上などでも、必ずしも白襟紋付でなくとも宜しい場合にも、多數の人が白襟紋付だと、矢張り自分もさうしなければ、人に笑はれはせぬかと餘計に氣を揉む人が多いのですが、そんな場合には自分の見識を以て、それが間違つて居たならば、正しいやうにしてよい譯で、日本ではまだ婦人の禮裝する場合が確定して居りませんから、どうしても自分の考へで決しなければなりません。

一體何事に對しても定見がなく、人眞似を能いこととするのは、日本人の通弊ですが、婦人は殊にそれが甚しく、一から十まで人のする所を見て、自分の態度を決めるといつた風です。ですから常に態度がぐらついてゐて、傍で見ても氣の毒な場合があります。萬事に就いて自分の意見を立て、それによつて行動するとなれば、身體にも精神にも自然餘裕が生じ、態度に落付が出来て、見苦しくない行ひが出来るのであります。

質素一點張も考へもの

以上に述べたやうに贅澤の風潮に對しては、虚榮を避けて身分相應といふ點を忘れぬやうにせねばなりません。元來贅澤といふことも一面から見れば、必ずしも排斥すべきものでありませぬ。

かう申すと誤解する方があつても知れませんが、見事らしい服装よりは美しい衣物を着たい、不味い食物よりは御馳走が欲しいといふのは、極めて自然な人間の欲求でありますから、それを餘り抑へて質素一點張りにしますと、人心が萎縮して生活の樂しみを失ふ結果になります。それ故質素とか儉約とか申すことも、或る程度に止めておかねばならぬやうです。もとより無駄を省くのは結構ですが、無駄費ひをせぬといふ消極的方面以外、別に収入を増すといふ積極的な方面に考へ及ぼすのも必要ではありますまいか。即ち家があれば其の資産、夫の収入なら収入にのみ頼ることを廢めて、婦人自身も何か収入の途を講ずるやうにするのであります。そして生活の許す範圍で、美しい着物も着、美味しい物も食へると云ふ方が、儉約一點張の生活よりも、意義が

あるやうに思はれます。少くとも其の方が生活を愉快にし、生活を豊かにする所以であります。

女の強みを造つて置け

婦人自身の収入の途を計るといふことを申しましたが、これからの婦人は平常内職をするしなみに拘らず、必要な時には何時でもそれが出来るだけの技藝なり、知識なりを蓄へておくのは最も必要なことであります。夫が亡くなつた場合とか、兎に角非常なことのあつた際に、自活の途を心得てゐると安心出来ます。またさういふ萬一の場合を豫想しなくとも、慈善事業などに寄附する場合にも、夫の収入によらず、自分の働きで得たものを以てするとなれば、慈善の趣旨が一層徹底する譯であります。

また家庭内にありまして、婦人に經濟上獨立出来る資格があれば、餘程婦人に強味が添つて來ます。一から十まで、どんな無理な壓制でも夫に盲從しなければならぬといふ、憐な境遇に陥ることが無くなりませう。表に現さずとも奥に自信があれば、夫も妻を尊敬する傾きを生じ、夫婦の間は却つて圓滿に行くものであります。夫婦はお互に信じ合ふもので、主人と召使との關係

ではないのですから、何れにしても自活の基礎を築いておくのは、今後の婦人にとつて必要な心掛けであります。

夫の不身持と妻

夫婦の間を圓滿にするには、先づ妻は夫の慰安者であり、片腕である心掛けと用意とが、充分に備つてゐなくてはなりません。手近の例を申せば、相當の身嗜みも必要であり、料理などにも心を用ゐる必要がありませう。儉約だと言つて何時も汁と香の物ばかりであり、眞黒になつて働くからと言つて、形振も構はなかつたなら、夫は決して好い氣持ちはしません。誰しも美しいもの、味のよいものを好くのは人情ですから、夫の感情が満足させるやうな方法を取らないのは、遣り方の拙なものと云はねばなりません。夫が外へ出がちなのは、家庭内がむさくるしくて、居心地が悪いと云ふやうな場合が多いのですから、一面、主婦として考へねばならぬことでもあります。自分が家の爲にこれだけ働いて居るのに、人の氣も知らずにと不平を並べる主婦もありますが、不平を言ふ前に、自分の遣り方に就いて反省する必要がありませう。世帯持がよいと云ふ

のは、必ずしも形振に構はないで働くといふことでなく、まともな家庭を作つて行くことでもあります。

西洋では良妻とは夫のために、遊ぶ時は遊び相手、苦しい時には慰め手、心配があつた時は相談相手といふ意味の諺があります。味ふべき言葉であります。之には夫の趣味性質から、職業の方面にまで理解と同情を持つて居たなら、夫にとつて家庭は最大の慰安所となり城となることは疑ひない所であります。

常識を養へ

妻が夫の慰安者となり、相談相手となり、要するに夫をして家庭の幸福を感じさせるのは、主に妻に常識のあるなしによるのだらうと思ひます。一家の主婦たるものは、特に専門の學問や知識を持たずとも、常識が圓滿に發達して居りさへすれば、夫に不快な感情を起させたり、不満を與へたりすることは無い譯です。

然るに我國の婦人には常識が缺けてゐる人が多く、陰に陽に夫婦間の和合を妨げてゐる場合が

少くありません。それにはどうしたらよいかと云ふに、子供の時から心がけて置かねばなりません。我が國の母親は餘りに學校を頼り過ぎます。然るに學校では時間に限りがあり、大勢を一緒に教へるので、何から何までとは手が届きません。細い點は母が注意していろ／＼なことに當らせ、経験を積ませるやうにすべきであります。常識は實際経験の間から自然に生れて來るので、それが書物で習つた知識と相俟つて、一層完全に發達して行くのであります。

我國では女中を使つてゐる様な家では、娘を家事の手傳ひに使ふことは殆どありませんが、西洋では之と反對に、相當の年齢になれば、母が指導して家庭の内外の事に實際當らせますから、應待にもなれ、表情に富んだ、活々とした氣の利いた婦人が多いのであります。此の點は我國の家庭に於ても充分に考へ、母自身がよき指導者として努めて欲しいものであります。

昭和九年九月十日 印刷
昭和九年九月十五日 發行

女子文化叢書第三輯
若き女性に贈る
定價 十 錢

不 許
複 製

著 者 山 脇 房 子
發 行 者 片 岡 重 助
印 刷 者 鈴 木 源 太
東京市小石川區護国町二一六

發行所

東京市麹町區裏區ケ團四番地
財團法人 大日本聯合婦人會
振替東京二三七八〇番
大日本聯合女子青年團
振替東京六八四八一番

書叢化文子女

第一輯 誠と慈悲 島津治子著

第二輯 やさしい婦人の作法 兩會團編

232119171513119753

以下凡そ月一回宛刊行豫定 (順序不同)
 若き女性に贈る 家庭料理くさくさ
 家庭園藝 漬物のいろく
 家庭娛樂 家庭看護法
 家庭の衛生 婦人の便所
 臺所と現代思潮 婦人と家庭
 職業婦人と家庭 婦人と數の觀念

2422201816141210864

家具と室内裝飾 新世帯入門
 學童を持つ母 家庭統制
 女大學新解 家計のたて方
 親心の子ども 愛玩用動物
 子供の育て方 家庭の趣味
 婦人と趣味

四六版六〇乃至七〇頁
 定價各輯金十錢(送料共)
 十二輯 前金一圓 二十四輯 前金二圓
 五十部以上一括注文ハ一割引

表紙美麗三度刷

會人婦合聯本日大 團年青子女合聯本日大

所行發

地番四關ヶ霞裏區町麴市京東

終

